

Ⅳ-160

築川ダム周辺環境整備のための移転者・定住者・来訪者の意識に関する考察

岩手大学大学院 学生員○大泉 剛
 岩手大学 正 員 安藤 昭
 岩手大学 正 員 赤谷隆一
 岩手県 正 員 笹岡富男

1. はじめに

近年、行政に住民の声を取り入れることが重要なこととして認識されるようになり、建設事業においても事前のアンケート調査や聞き取り調査を実施する事例が多く見受けられるようになった。

しかし多くの場合、評価主体は地域住民だけに限られてきた。ダム建設事業のように影響が広範囲に及ぶ事業では、地域住民に加えて、移転者および定住者からの評価も重要なものになるものと思われる。

本研究は盛岡市において建設中の築川ダム周辺環境整備を対象に、ダム建設に伴う移転者、ダム周辺地区に居住する定住者、レクリエーション目的でダ

(1) 築川ダムおよび調査対象地域の概要

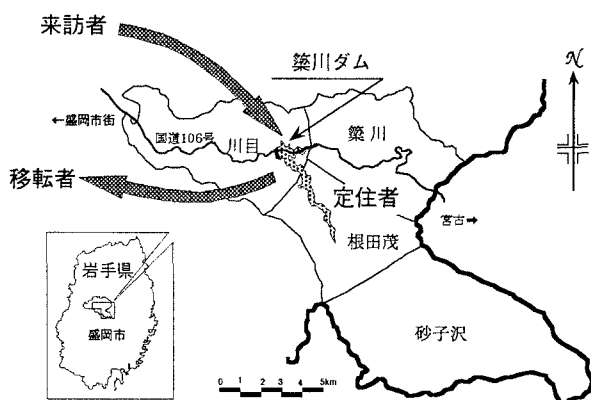
築川ダムは盛岡市の中心部から東へ約10kmの北上川水系築川に平成18年度の完成を目指して建設中のダムであり、25世帯が移転予定である。築川ダム周辺地区は東部丘陵地区と呼ばれており、川目（かわめ）、築川（やながわ）、根田茂（ねだも）、砂子沢（いさござわ）の4地区から構成されている。北上山地を縫う細長い谷間に、住居とわずかな面積の農地が散在し典型的な山村の様相を呈している。人口は513人で停滞傾向にあり、老年人口割合も25%と高い。しかし多くの住民が市の中心部へ通勤しており、都市近郊農村としての性格も持ち合わせている。

(2) 住民意識調査の概要

前述の通り、住民意識調査は移転者、定住者、来訪者を評価主体として実施した。移転者には移転後の生活再建、および地域の財産に関する保存の意向を中心に質問した。定住者へは築川ダム周辺地区の生活環境に関する評価を中心に質問した。また来訪者としては、盛岡市の中心部に居住する住民を選定し、レクリエーション地区としての築川ダム周辺環境整備の方向に関して質問した。調査実施概要を表一1に示す。

表一1 住民意識調査の概要

	移転者	定住者	来訪者
調査時期	1994年2月	1995年1月	1995年11月
調査方法	訪問留置法	訪問留置法	直接面接法
配布数	88票	486票	—
有効回収数	70票	330票	495票



図一1 築川ダム周辺地区地図

ム周辺地区を訪れる来訪者（図一1）に対して実施した住民意識調査の結果を考察するものである。

2. 住民意識調査の概要

キーワード：ダム周辺環境整備、住民意識、移転者、定住者、来訪者
 〒020 岩手県盛岡市上田4-3-5 tel.019-621-6453 fax.019-621-6450
 〒020 岩手県山王町5-15 tel.019-652-8821 fax.019-652-8821

3. 住民意識調査の結果および考察

三評価主体に対して実施した住民意識調査から得られた、それぞれの特徴的な点を述べていく。

(1) 移転者への住民意識調査から

・移転には消極的賛成である

調査実施時点で既に、移転に対しては90%が応じると回答しており、移転に関する一応の合意は得られていた。だが半分以上の移転者は「仕方がなく応じる」と回答しており、しかも86%の回答者が「ダムを建設するのならば仕方がないから」を移転に応じる理由として挙げている。この結果から移転に対する消極的賛成の態度を読み取ることができ、移転に際して移転者への十分な配慮が望まれる。

・原風景の保存要望が高い

ダム建設後も地域の財産として将来にわたり保存して欲しいものとして、水没地区にある鳥居や木造校舎の小学校、市の民俗文化財に指定されている郷土芸能が高い支持を得た。移転後は地区の人口が半減し、小学校の存続や地域活動への支障が懸念される。

(2) 定住者への住民意識調査から

・自然環境の評価が高い

築川ダム周辺環境の課題を把握するために実施した生活環境の評価では、自然の豊かさ、空気のきれいさに関する評価が高く、ダム建設工事でこれらの環境を損なわない配慮が望まれる。

・利便性の評価が非常に低い

反対に評価が非常に低かった項目は、バス運行、道路の整備状態、職場への行きやすさなど、利便性に関わる項目が大半を占めている。生活環境総合評価を外的基準に行った数量化理論Ⅱ類による解析でも、利便性の評価の低さが生活環境総合評価の低さに大きく影響していることが示され、利便性の改善がダム周辺環境整備の重要な課題となるものと思われる。

(3) 来訪者への住民意識調査から

・親自然型のダム周辺施設

来訪者へは、築川ダム周辺をレクリエーションの場として整備する場合、どのような整備方向が望ましいかを質問した。施設としては、森

林公園、自然散策道など、現在の自然環境を体験できるような施設に支持が集中していることが明らかとなった。

・ダム周辺環境整備は自然環境保全型

盛岡市周辺にあるダムの周辺環境整備を例に挙げ、築川ダム周辺環境整備の方針としてはどのような方向が望ましいかを選択してもらった。結果は「自然環境保全型」の整備が36.8%と最も高く、ついで「野外レクリエーション地区整備型」となった。

4. まとめ

以上の住民意識調査から得られた結果をまとめていく。

移転者の移転に対する態度は消極的なものであり、移転に際しては移転者の心情面への配慮が望まれる。そのためにも、思い入れの強い地域の原風景の保存が重要となるものと思われる。

自然環境は定住者から高い評価を得ており、来訪者も魅力的なものとして捉えている。よって自然環境の保全は生活環境整備、レクリエーション地区としての整備のどちらにも関わる重要な要素であり、最大限の配慮が望まれる。

また生活環境整備に際しては、自然環境の保全のみならず利便性の改善も重要な課題である。

5. おわりに

築川ダム周辺環境整備を対象に、移転者、定住者、来訪者に対して実施した住民意識調査から、移転者、定住者、来訪者の間にはそれぞれ意識の差異があることが明らかとなった。今後はダム完成後の事後評価について、同様に三者の間に意識の差異について調査を実施する予定である。最後に、本調査を実施するにあたりご協力いただいた、築川ダム周辺地区の皆様と盛岡市民の皆様には謝意を表します。

参考文献

- 1) 「築川ダム建設に伴う周辺地区住民生活環境意識調査」、安藤 昭、大泉 剛、赤谷隆一、今野直剛、土木学会第50回年次学術講演会概要第4部、1995年